

2020年2月3日

ハイデッガー『存在と時間』レジュメ

作成：木村春里

第四章 共同存在と自己存在としての世界＝内＝存在、「世間」

「日常性において現存在であるのは誰れなのか」(250頁)ということについて考える。

ここで追跡する現象は、当然ながら現存在の日常的存在様式、さらに言えば内＝存在という存在形式に規定されている。この誰れかをたずねる問いを深めていくと、「共同存在」、「共同現存在」という世界＝内＝存在と同じく根源的な現存在の存在構造(すなわち存在様式)へと到達する。

第25節 現存在の誰れかをたずねる実存論的な問いの手がかり

この現存在であるのは誰なのか、という問いに対して、それはいつでも私自身の存在であるという解答は十分でない。存在的にはそれは確かに、誰れかという問いが自我ないし主体によって直ちに解答されることを意味している。一方で存在論的での自己は、あるまとまった領域のなかで、その領域にとって常に初めから存在しているものであり、これを基体(das Subjectum)と呼ぶ。基体には他相を通じて(すなわち、直ちに自己それ自身という仕方ではなく)自己に等しいような性格が備わっており、その性格を持って自己(das Selbst)と呼ぶ。

ところで、「自我」の所与性をも(存在論的に)疑うことは、存在する世界、他の自我などすべてのものを無視することにつながるのではないと思われる。そして確かに、反省的な仕方でも得られる形式的な自我覚知は明証的なことであると言える。しかしそのようにして与えられた自我は、あくまで形式的表示としてのみ明証的たるのであって、現存在の日常性、すなわち「そのつどの現象的存在連関」(255頁)のなかにおいては、与えられた意味での「自我」とは違う存在様態を示しうるのである。

以上の理由から誰れかをたずねる問いに答えるには、反省的に得られる形式的自我の所与性から始めることはできない。それゆえ、世界＝内＝存在が居合わせている共同現存在の存在様態を、日常性において分析し、現象的に解釈することが課題となる。この課題に取り組むに当たっては、第九節で述べたこと、すなわち「現存在の「本質」はその実存にもとづく」(256頁)ということを手がかりとする。